

〈利用者の声〉

つんどく  
積読のすすめ

教育学部助教授

田村道美

先日、小生の研究室を初めて訪れたT氏は開口一番、「部屋中に筍が生えてるみたいですね」と言われた。床や机の上に積み重ねて出来た何十本もの本の柱をそう譬えられたのである。研究室に「筍」が生え出したのには勿論訳がある。誰しも経験があるように、或る本が必要になって、いざそれを探すとなるとなかなか見つからないものである。そんな苦い経験を重ねた結果、将来役に立ちそうなものは兎に角購入することにした。「筍」が生え始めた所以である。この積み上げた本のお陰を被ったことは多々あるが、今回は人に喜んでもらえた例を紹介し、「積読のすすめ」としたい。

昨年、社会学を専門とされるK氏から「*The Private Secretary*の作者をご存知ないでしょうか」と尋ねられた。K氏は、『宗教と資本主義の興隆』で著名なR. H. トーニーの或る著書を翻訳刊行されたそうである。その著書の中に上の作品への言及があり、「古い有名な劇」と一言説明があるという。それを手掛りに調べてみたが分からず、某大学の英文学の先生に尋ねたところ、T. S. エリオットの作品であるとの教示を得た。それで、訳書の注にその旨記したが、その後エリオットにそんな作品がないことを知り愕然とした。[エリオットに*The Confidential Clerk*という劇がある。これは『秘書』と訳されている。某先生はこの日本語訳に引かれてエリオットの作品と早合点されたいらしい。] 誠実なK氏は改版の際にこの誤注を訂正したいので、何としても著書の名前を突き止めたいという。

小生もそんな題名の劇は初耳であったが、K氏の真剣な表情に動かされて、とにかく調べてみることにした。手許にある英文学辞典や百科事典の類、さらには『ケンブリッジ英文学史』（全十四巻）の別巻「索引」412頁を虱つぶしに調べたが見当たらな

かった。これ以上は無理と匙を投げかけたとき、*A Guide to the Best Fiction*(1932)が目にとまった。これは小説史の碩学E. ベーカーが欧米の小説に数行の解説を施した小説辞典で、「ベスト」と唱いながら、一般の文学辞典には出ていないような小説も取り上げられており、何かの役に立つのではと思いきり買求めておいたものである。「しかし、まさか劇までは」と思いつきながら索引を見ると、なんと*The Private Secretary*があるではないか。軽い興奮を覚えながら、そこに記されている頁を開けてみると、Chesney, Sir George Tomkyns [1830-95]とあり、*The Private Secretary*の出版年(1881)とその内容が4行に亘って記されていた。紙幅の関係でその内容は紹介できないが、この作品は実は小説だったのである。劇というのはトーニーの記憶違いであったようである。さらに、固有名詞が充実している*Nelson's Encyclopaedia*を引いてみると、果たしてChesneyが見出し語として収録されていた。その説明によれば、*The Private Secretary*は彼の小説中で最も人気の高かった作品であるという。また、彼の兄Charlesは陸軍士官学校の兵学教授で、伯父Francisはスエズ運河建設計画に貢献した軍人探検家であったことを知ることができた。

以上のことをK氏にお伝えしたとき、氏がどのような表情をされたかはここに記すまでもないであろう。

